「源」と「平」の成立とその影響

増山雄三

平安初期、天皇家の財政が困窮し、多くの皇子達を養っていけなくなったので、弘仁五年（八一四年）嵯峨天皇の時、「源」という姓が創設され、多くの皇子皇女にそれを持たせて、臣籍に下して官位にありつかせた。

源は、訓読するとミナモトともいうが、それは天皇家に源を発する意味といい、また別の説によれば、中国の北魏のとき、世祖が禿髪破姜という鮮卑人の家来に、「源」という姓を下賜し、名を賀と称させた故実からとったというが、それは考え過ぎかも知れない。

このように、八一四年に源姓が成立したという事は、その後の日本人の社会意識に忌々しい影響を齎したと思わざるを得ないが、先ず、源は中国風の一字姓という事で、中国では先の禿髪の例で分るように、異民族出身で

ある場合が多く、あまり貴ばれない。

ついでに言えば、国名ですら中国内地の王朝は一字であり、例えば、殷・周・趙・燕・秦・漢などといったふうで、これに対し蕃国は二字に決まっていて、それらは、匈奴・柔然・康居・新羅・西夏・日本という具合だ。

そして、源姓が創始された八一四年は、まだ遣唐使の時代であり、その大使は、巨勢・土師・吉備・阿部・藤原・大伴・長峰といったように二字姓だったので、長安の社交場では、自分の姓を田舎臭いと思ったようで、藤原葛野麻呂などは、入唐すると公文書には、「藤賀能」と改めたりしたという。

また、源姓は名の様式まで変え、それは源の下に、葛野麻呂や入鹿という日本固有の名前は付け難く、臣籍降下して源姓を名乗った最初の人物は、源信と源融で、ゲンシンとゲンユウなら、遣唐大使を命ぜられても、長安の人士から違和感を持たれずにすむ。

ついで、源の成立から十一年後の八二五年

には、桓武天皇は葛原親王の子を臣籍に下して、はじめて「平（ヘイ）」という姓を起こさせ、その初代は平高棟だが、音でよめば唐人の姓名になるので、高棟と同時代の初期平氏一族の名が、高望・知信・良兼・良文といった、中国風の名になったのである。

その後、源・平はふんだんに創られ、源氏の場合、最初の嵯峨源氏を含めて、淳和・仁明・文徳・村上・陽成・清和ほか、計十名の天皇の枝脈が大量に源氏になり、特に九六一年に成立した清和源氏は地方に土着して武家化し、後代には関東を制するにいたった。

一方、平氏は桓武を含め、仁明・文徳・光孝という、四人の天皇のわかれが賜姓され、関東に土着するのは桓武平氏で、平安末期には地名を名字にして、千葉・上総・三浦・秩父を含めた八氏が、「板東八平氏」と呼ばれて、板東の開発人として武力を誇った。

平安期の末期に、このような諸国の武士達は、「それがしは何国何荘の住人、遠く清和

源氏の流れを汲み」といいながら、兵衛の佐という低い位階を持つ「源頼朝」を擁し、武家政権を作って、その殆どが偽作された源平藤橘の家系を大切にしつつ、世々をへて明治維新にいたるのである。

令和四年二月